

〈背景と文脈〉

主イエスは天の国について教えられるにあたり譬えをよく用いられた。譬えと訳されたギリシヤ語は、「かたわらに」という語と「投げる」という語から成る合成語である。当時の人々が日常目にしてしている事柄を「かたわらに投げ」、比喻によって天の国の奥義を教えられたのである。マタイ13章には七つの譬えが記されている（註、ある学者は52節を含めて八つと数える）。

今日学ぶ譬えはそのうちの三つであるが、44節の「畑の宝」に関する譬えと45～46節の「高価な真珠」の譬えでは、天の国の絶大な価値に強調点が置かれている。また47～50節の「網と魚」の譬えは終末の裁きに関する譬えである。

〈天の国の絶大な価値 (44－46)〉

44節の譬えは、畑に宝が隠されているのを見つけた人が、持ち物を全部売り払ってその畑を買う話である。当時、盗みや略奪から守るために大切な物を地中に隠すことはよくあった。ちなみに、タラントンの譬えに登場する悪いしもべは、主人から預かった1タラントンを地の中に隠しておいた（マタイ25:25）。

畑の中に宝を見つけた人は喜びながら帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買う。宝を取得するためである。畑の所有者はその宝の存在を知らなかったようである。所有者以外の人がある宝を隠したが、時が経ち何らかの事情により所有者が代わったことが考えられる。しかし、それはこの譬えでは重要ではない。

宝を見つけた人は、それを取得するためには、その畑を買わなければならなかった。宝だけを取り出せば盗みになる。「喜びながら帰り」という表現は、その宝を取得するためには持ち物を全部売り払わなければならなかったが、そのことに少しの躊躇もなかったことを示している。

次の譬え話(45－46)はよく似た設定であるが、違う点は、この商人が良い真珠を探し求めていた

ことである。偶然見つけたのではない。この商人は高価な真珠を見つけると、何としても手に入れたいと願った。自分自身のためだったと思われる。

畑で宝を見つけた人とこの商人の共通点は、犠牲を払っても入手したいと思うほどの絶大な価値のあるものに出会ったことである。二人とも持ち物を全部売り払うという犠牲を払わなければならなかったが、彼らは喜んでそれをした。使徒パウロはフィリピ3章7,8節で、「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。……キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています」と言っている。天の国は、他の一切のものを塵あくと考えるほど絶大な価値のあるものである。

〈終末の裁き (47－50)〉

47～50節の譬えは終末の裁きに関する教えである。弟子たちの中には、ガリラヤ湖でかつて漁師をしていた者がいた。漁師は魚を獲るために網を湖に投げる。当然、網の中にはいろいろな種類の魚がまじって入ってくる。漁師は網が一杯になると、それを岸に引き揚げると、すべての魚が食べられる良い魚ではない。食べられる良い魚だけを器に入れ、悪いものは投げ捨てる。選別作業をするのである。その点で13章24～30節、36～43節の「毒麦の譬え」と似ている。地上では良い麦と毒麦が混在しているが、そのままにされている。しかし刈り入れの時には、良い麦と毒麦は選別される。どちらの譬えも、終末の裁きにおいて人々が二分されることを示唆し、聴く者に警告を与えている。

終末を迎えていない今は恵みのときであり、天の国への招きが与えられている。天の国の絶大な価値を知り、その招きに応えよう。そして、それを喜び、それに満ち足りる生き方をしよう。

(後藤公子)

テキスト ヨハネによる福音書 13章44～52節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

主イエスの語られた天国のたとえである。13章44～52節がテキストとしてあてられているが、ここでは44節と45～46節のふたつのたとえにしぼった。主イエスを知ることのすばらしさ、絶大な恵みが畑に隠された宝、商人が見出した高価な真珠になぞらえられている。この世の人々はこの世の宝に目を奪われがちであるが、主イエスこそ真の宝であられることを信仰の目をもって確かめたい。そしてわたしたちがその宝をすでに与えられていることを覚えて、感謝をあらたにしたい。

「この上ない宝」

わたしたちは主の日ごとに教会に集まって、イエスさまのみ言葉を聞いています。イエスさまのみ言葉はこの上ない宝です。そしてみ言葉を聞く人々は、すでにこの地上で天国の幸いへと招かれています。それがどれほどすばらしいことであるのかを、イエスさまがお語りになったたとえをとおして学びましょう。

天国の幸いに招かれた人は、畑の中に隠されていた宝を偶然見つけた人に似ています。イエスさまが地上に生きておられた時代には、人々は宝を壺の中に入れて、土の中に隠しておいたようです。家の中に宝を置いておくと、泥棒に盗まれてしまうかもしれません。強盗に襲われてしまうかもしれません。それで、土の中に埋めておくことがいちばん安全だったのです。

ただし、宝の持ち主が死んでしまうということも起こり得ます。そういう時には、畑に隠された宝はだれにも気づかれぬまま、長い間土の中深くに眠っているということもあったでしょう。

しかし、そのように長く隠されたままであった宝を、その畑で働いていた人が偶然掘り当てたとしたらどうでしょうか。その人は思いがけない発見に喜び、持ち物を売り払って、宝の埋まったままの畑を畑ごと買うでしょう。そうすると、彼自身がその畑の主人になることができますからです。

天国の幸いは、その宝の埋まった畑です。その

価値のすばらしさに、それを見出した人は持ち物をすべて売り払っても惜しくないのです。

天国の幸いに招かれた人はまた、高価なよい真珠を見出した商人に似ています。宝石の価値は、目の肥えた人でないとなかなかかわからないと思います。わたしたちが見ただけでは、どれも同じに見えますね。

けれども目利きの人が見れば、その宝石の価値はきちんとわかります。たった一粒でも、はかり知れない価値をもっている真珠もあります。そういう真珠を見つけたなら、商人はわれを忘れ、何としてでも自分のものにしようとするでしょう。それだけの価値があることを知っているからです。

天国の幸いは、商人が見つけ出したそのひと粒の真珠です。それを手に入れるためには、全財産を投げうってでも惜しくはないのです。

イエスさまのみ言葉は、畑に隠された宝です。イエスさまの命の恵みは、高価なひと粒の真珠です。それは隠されているので、だれもがすぐに見つけることができるわけではないかもしれません。ほかの真珠と見分けがつかないので、目利きの人が見なければその価値はわからないかもしれません。この世には人の目を魅了する多くのものがあります。真珠もあります。宝もあります。この世の人々はこの世の宝に目を奪われて、イエス

さまに目を向けようとしなないかもしれません。イエスさまのみ言葉を聞こうとしなないかもしれません。

けれどもイエスさまこそ、わたしたちの宝です。この世のものは過ぎ去ります。どれほど価値が高いと言われている宝石も、やがては朽ち果てます。しかしイエスさまはわたしたちに、朽ちることもしほむこともない命の宝をくださるのです。天の宝です。この宝こそ、すべてのものを投げ出しても惜しくはない価値をもつのです。この宝を見出した人は、この世のものではない喜びを得るのです。パウロという伝道者は語っていますーイエスさまを知る前に、わたしはこの世で価値のあると見なされている数々のものを手にしていました。

しかし今、イエスさまを知ることのあまりのすばらしさに、それらを塵あくと見なしています。

イエスさまという宝を見出すことのすばらしさを、心深く覚えたいと思います。ぜひ覚えておきたいことは、わたしたちは今すでにその宝を見出しているということです。わたしたちは主の日ごとにイエスさまにお会いしています。イエスさまのみ言葉を聞いています。何と大きな幸いでしょうか。わたしたちが自分で掘り出したわけではありません。自分で見つけ出したのではありません。イエスさまのほうからわたしたちと出会ってくださったのです。この宝をしっかり握りしめて生きていきましょう。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 6章20節前半
富は、天に積みなさい。



〈ねらい〉

わたしたちにはかけがえのないものがあることに心を留めたい。イエスさまがくださった「いのち」はわたしたちの宝である。この宝の重さはどれほどであろうか、と問いかけたい。

〈展開例〉

みなさんは、とても大切にしている「たからもの」をもっていますか。それは、どんなものでしょうか。

みなさんは、イエスさまがくださったたからものを知っていますか。それは、イエスさまが愛しておられる人びと、わたしたちひとりひとりです。

イエスさまがどうして十字架におかかりになったのでしょうか。それは、わたしたちひとりひとりを神さまの宝物とするためです。だから、むかし、イエラエルのひとびとは、「たからのたま」と呼ばれたくらいです。

それでは、わたしたちは、そのくらい、神さまに「たからもの」とされたことを大事にしていますか。

神さまからくださったもので、わるいもの一つもありません。ぜんぶ、よいものです。そして、イエスさまが十字架によって、わたしたちを愛してくださったことは、どんなものにも代えることのできない、ほんとうにどうい「たからもの」です。

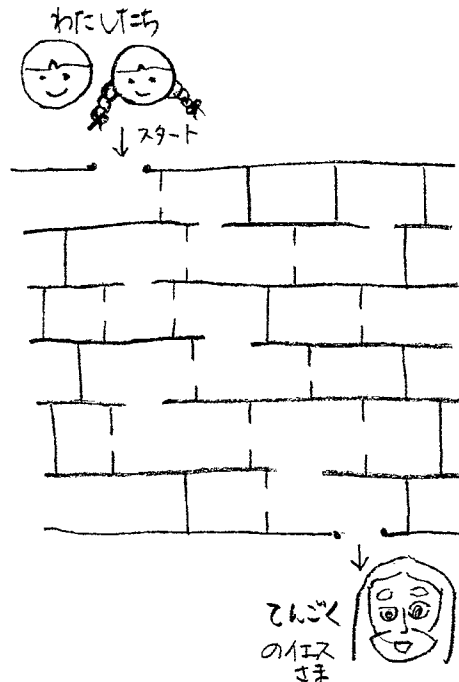
いつも、イエスさまがわたしたちを「たからもの」としてくださるほどに愛してくださっていることをかんしゃしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、み名をさんびします。いつも、イエスさまのあいを大切にすることができますように。イエスさまのみ名によっておいのりします。アーメン。

〈やってみよう〉

○イエスさまのところにいくみちは？



ねらい

この聖書箇所が説明しにくい場合には、マタイ福音書13章1～9節の種まきのたとえで説明しても許されよう。道端の種、石だらけの種、茨の種、良い土地の種、と語られているが、神さまが、私たちの心—畑—を耕して、石や茨を取り除き、良い畑にしてくださることを祈り求めることもできる。

展開例

小さい子どもに向かって、毒麦や敵の仕業についてはあまり説明する必要はない。むしろ、だれでも、神の恵みと憐れみによる以外に救われる可能性はないといえる。だから、否定的なことはあえて語る必要はない。

いやなことや悪いことがあれば、神様に取り除いてもらうように、祈ることを勧めてみよう。

話し合ってみよう！

畑の麦や種まきのたとえ、草花の成長、など、神の国は、日常の生活の中で、始まっていることを感じてみよう。

祈り

毎日の生活が、神様の国につながるができるようにお導きください。

～ 1週間のミニ日記 ～

先週、一番いやだったことを思い出して、何が原因なのか考えてみよう。



お祈りしたいこと



いやな体験を神様に伝えてみよう。

聖書日課

マタイ13章1節—9節

マタイ13章44節—52節

暗唱聖句

富は天に積みなさい。

(マタイ6:20)

✠聖書をひらいて(マタイによる福音書 13章 44節～52節)

☆問題：
『白い鏡(かがみ)と黒い頭(あたま)を使って、読んでください。』

『●な●○●は、これらのこと○ ○なわ○っ●○。』でし●ちは「わ○り●し●」といっ●。

こたえぬぬぬ



✠考えてみよう (みんなで、考えてね!(*^*)v)

☒「天の国」を、「畑の中の宝」や「高価な真珠」にたとえているのですね。たとえはちがいますが、両方とも「持ち物をすっかり売り払って、それを買う」は同じでした。自分の今まで持っていたもの全部を引きかえにしても、価値があるのですか?? (Mちゃん・10才)

✠言ってみよう

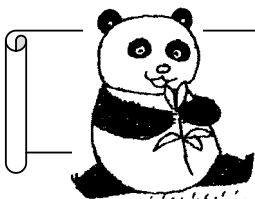
問1 私たちは何のために生きるのですか

私たちが生きるのは、私たちの神さまを○○、神さまを○○○○、神さまの栄光を○○○○ためです。これが私たちの○○○○です。

✠やってみよう —ワン・ツー・ゲーム—「宝ものさがしゲーム」

- ① キャンディー1袋を用意します。個々のキャンディーの裏に「ト ミ ハ テ ン ニ ツ ミ ナ サ イ」とマジックで文字を書き、文字が見えないようにひっくりかえして、バラバラに机に広げます。
 - ②順に、好きなキャンディーを取り、裏に文字がかいてあるものは、「あたり」!うらに文字が書いてあるキャンディーをたくさん取った人はダレかな?さらに全部の文字を取って、みことばになったらスゴイ!!!その人は、他の人が取ったキャンディーも全~部!!もらえます。
- ☆「みつけた人は、そのまま隠しておき喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う」

✠今週の暗唱聖句 (マタイによる福音書6章 20節)



富は、天に積みなさい。

〈展開例〉

- ①「天の国」とは、どこかにある場所ではなく、神さまのご支配のことを意味します（他の福音書では「神の国」と訳される言葉）。主イエスは譬え話をとおして、天の国とはどういうものかをお語りになります。天の国とは、「隠された宝」（44節）だということです。隠されているということはどういうことでしょうか。それは、誰の目にもはっきりと分かるわけではないということです。
- ②では、隠された宝を誰が見つめることができるのでしょうか。それは神さまを信じて生きている人たちです。目に見えないものをじっと見つめるのが信仰なのです（ヘブライ11:1）。クリスチャンは隠された宝を見出した人たちのことです。では、どのようにして見つけたのでしょうか。一所懸命、土を掘り起こしてやっとのことで見つけたのでしょうか。どうもそうではないようです。興味深いことに畑仕事をしていたら、偶然に、宝を見つけたようです。信仰へ導かれ方は様々です。深い悩みの中で、助けを求めるようにして、教会の門を叩き、神さまの救いを見出した人もいれば、思いがけない出来事をきっかけにして、信仰に導かれることもあるのです。教会学校の先生方はどのように、隠された宝を見つけられましたか。
- ③クリスチャンは天の国という隠された宝を見出した人たちです。ただ聖書をよく耳を傾けますと、すぐに宝が自分のものになったようではないようです。宝を自分のものにするためにしたことは何でしょう。それは、持ち物をすっかり売り払って、畑を買うことです。真珠を買う人の場合も同じで、「持ち物をすっかり売り払います（46節）。要するに、天の国の隠された宝は、

持っているすべてのものを投げ打ってまでも、手に入れる価値があるのです。ただ誤解しないでほしいことは、クリスチャンになるためには、全財産を売り払わないとダメということではありません。この譬えを通して語られている天の国とは、何事にも代えがたい宝として真剣に求めていく者になること、つまり、キリストの弟子になることへの招きです。そして、キリストの弟子になることは、「喜びながら帰り」（44節）とあるように、悲壮感に満たされてすることではなく、隠された宝を見出した喜びに突き動かされて歩いていくことです。

- ④隠された宝を手に入れようと立ち上がった者たちのことを、52節では「天の国のことを学んだ学者」と言い換えています。クリスチャンは、誰でも「天の国のことを学んだ学者」になれます。「自分の倉から新しいものと古いものを取り出す」ことができます。要するに、豊富な知識のゆえに、様々な状況下の中で相応しい知識を取りだし、賢く対処することができるということです。だから、天の国に生きる人は、「どんなことがあっても大丈夫」という信仰に生きることができます。
- ⑤神さまではなく、サタンが支配していると疑ってしまうような中であっても、誘惑に負けることなく天の国の支配の中に生きることができます。なぜでしょう。47節には、天の国について、魚を捕らえる網の譬えが語られています。私たちが生きているこの世界は、「神の網」の中に捕らえられています。すべては、神の網という名の、「御手」の中で起こっている出来事です。目に見えている現実がすべてではありません。隠されている神の愛のご支配を見続けることができる信仰の眼差しが与えられますように。

